

ふたつの連続講座、好評開催中!!

寺町倶楽部では、現在、ふたつの講座を開催中です。いずれも2月の寺子屋トークを皮切りに、3月下旬まで実施します。

■アナタとつながる、ワタシをきづく・きずく

シングルの生き方をめざそうとしても、ためらうことはありませんか? この前向きな気持ちに蓋をするのは、ジェンダー観かもしれません。わたしたちの心の中にある固定観念を見つめ、そのしほりを解きほぐす……、講座形式ではなく、自分で考え、わたしたちが育ってきた環境を振り返りながら、他の参加者とディスカッションしてともに考える講座です。

■アーツなお仕事・発見セミナー

“アーツなお仕事”というと、「芸術家になる」「劇場やギャラリーで働く」、そんな華やかなイメージを抱きがちです。しかし、芸術はもっと幅広く普遍的な文化であり、“アーツなお仕事”も日常生活に根づいたさまざまな職業の中にあるはずです。

“アート(Art)”の原意は「創意、技」。「困難な課題を巧みに解決し得る熟練した技術」という意味もあります。人々の日常に関わる仕事を通じて、地域のさまざまな場、人と人との関係を結び直し、小さくてもいい、地域の人々の生活や生き方の質を高めていけるような、「職業の芸術化」を実践する“アーティスト”が一人でも多く生まれることを願っています。

※詳細は、同封のチラシをご覧ください。

いのちと出会う会

「いのちと出会う会」の3月と4月の予定をお知らせします。

第38回

3月18日(木)
「死を見つめる
ということ」

話題提供者

岸和田喜多病院カウンセラー 岩崎美樹さん
緩和ケア病棟での多くの患者さんとの出会い。ガンなどの痛みだけを緩和してただ苦しめるだけの治療は行わず、人生最後の日を迎えるホスピスから見てきたもの……。アメリカでカウンセラーとしての学びを終えた岩崎さんは、患者さんやその家族のグリーフ(悲嘆)を希望に変える心のケアをして、多くの気づきを得られました。死にゆく人から教えられた人生にとり大切なものを語っていただきます。

第39回

4月15日(木)
「人間として
生を受けた喜び」

話題提供者

私塾わんど塾塾長 山藤忠雄さん
わんど塾とは、“居場所を失った子どもたち”の心のよりどころ。自称「おっちゃん」の塾長・山藤さんと、非行、不登校など“問題児”とレッテルを張られた子どもたちとの、心のぶつかり合いが、毎日のように繰り広げられます。塾名物「わんど鍋」を囲みながら、言いたい事を聞き、解決に向けた指導をして帰し、校長に事情説明し、対応を話す。荒れる子どもたちと向き合い、見えてきたものを語っていただきます。

※いずれも18:30開会、21:00閉会

※参加費:会員800円、一般1000円

4月17日・18日、
エンディング見本市を開催!!

大蓮寺・エンディングを考える市民の会では、2003年1月の設立以来、“エンディングを見つめる社会的な場づくり”をめざし、医療や葬送などの分野で活躍するNPOと共に、お寺を核としたサポートネットワークを作り、「自己決定のためにまず知ること」をねらいとしたセミナーを開催してきました。同会が、活動開始1周年を迎えるこの春、「住職掲示板」でもご案内の通り4月17日・18日の両日、「エンディング見本市」が開催されます。

ぜひ、多くの方々のご参加をお待ちしています。

【新入会員ご紹介】

(2004年2月25日まで)

前号以降にご入会いただいた方です。

ありがとうございました。

○個人会員

【大阪府】

坊下明信 柏原市

細見優子 大阪市天王寺区

なお、以下の方々から下記の通り、ご寄付を頂戴いたしました。紙面を借りてお礼申し上げます。

○寄付

松浦善満様 金10,000円也

野寺夕子様 金6,000円也

坊下明信様 金2,000円也

サリュ VOL. 42

應典院寺町倶楽部のニューズレター

発行日 2004年2月25日
(偶数月発行)

編集長 川井田祥子

スタッフ 池野亮、大塚郁子

発行所 應典院寺町倶楽部

〒543-0076

大阪市天王寺区下寺町1-1-27

TEL 06-6771-7641

FAX 06-6770-3147

Salut

應典院寺町倶楽部のニューズレター

vol.

42

サリュ

フランス語で救いの意



大阪で3年ぶりに開催された、トヨタ・アートマネジメント講座。

アートマネジメントの実践現場を訪れ、語り合った参加者たちが再確認したもののひとつが、日常生活に新たな魅力や可能性を発見させてくれるアートの力。2日間の講座を終えて自分の住むまちに帰ったとき、アートの力を解き放ちたいと望む一人ひとりの熱い思い。これからさらに練り上げられ、実践に結びついていきますように。

2004.February

トヨタ・アートマネジメント講座大阪セッション、熱く開催!

出合い・交流・共振、体験を通じて考えた「アートマネジメント」

プログラム ※敬称略

【24日(土)】

- ①大阪セッション・ことはじめ
開催趣旨の説明&オリエンテーション
- ②ウォーミング・アップ
「アートは都市再生の特効薬になり得るか？」
基調講演&トークセッション
ゲスト:佐々木雅幸
(大阪市立大学大学院創造都市研究科教授)
山納 洋
(扇町インキュベーションプラザコラボレーション・マネージャー)
- ③フィールドワーク作戦会議
参加者が9つのグループに分かれて話し合う。
各グループにはリーダーを1~2名配置(下記のメンバー)。
・大阪市立大学大学院創造都市研究科
……上野信子、山口透、横山好三
・(株)地域計画建築研究所
……絹原一寛、中塚一、西村幸治、森岡武
・立命館大学政策科学部
……石田圭佑、岡田真実、倉恒亜紀、松井美樹
- ④だるまトーク
「遠くて近い? 宗教とアートの関係を問う」
應典院寺町倶楽部の活動紹介
- ⑤交流会

【25日(日)】

- ⑥フィールドワーク
参加者が下記から1つを選択し、現場で情報収集を行う。
(a)空堀商店街界隈長屋再生プロジェクト
(大阪市中央区谷町)
ゲスト:六波羅雅一
(からぼり倶楽部代表/六波羅真建築研究室代表)他
伴走者:熊倉純子
(東京藝術大学音楽環境創造科助教授/TAM運営委員)
- (b)新世界アーツパーク(大阪市浪速区恵美須東)
ゲスト:大谷 燾
(NPO法人DANCE BOXエグゼクティブ・ディレクター)他
伴走者:小暮宣雄
(京都橘女子大学文化政策学部助教授)
- (c)應典院/應典院寺町倶楽部(大阪市天王寺区下寺町)
ゲスト:秋田光彦
(應典院主幹/應典院寺町倶楽部事務局長)他
伴走者:市村作知雄
(東京国際芸術祭ディレクター/TAM運営委員)
- ⑦グループワーク&プレゼンテーション大会
グループごとに⑥での発見や疑問などを話し合い、情報を整理した後、他のグループに向けて発表する。
- ⑧全体会
⑥の伴走者が2日間を振り返り、今後の課題や可能性について話し合う。
コーディネーター:弘本由香里
(大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所客員研究員)

「“黒子に徹するリーダー”体験から学んだもの」

大阪市立大学大学院創造都市研究科 都市経済政策研究分野 上野信子

私は、古い建物を活かしたまちに関心をもっていたこともあり、フィールドワーク先は、空堀地区を担当しました。とくに悩んだのは、グループワーク後の発表について。時間的にきびしい状況の中で、どのような仕掛け、言葉かけが有効か、到達イメージは……リーダーの誰もが多少の不安を残したまま、当日もぎりぎりまで打ち合わせは続きました。

いよいよ本番当日の1月24日。わが大学院の佐々木雅幸先生や他のゲストの興味深いお話の後、いよいよグループ分け、フィールドワークの作戦会議です。ニコニコして近寄って来られた秋田住職と堅い握手を交わしたことが印象に残っています。

これから何がはじまるのだろう。緊張の面持ちで参加者が部屋に入ってきます。最初のゲームでは、岡田リーダー(立命館大学生)のいい味を出した司会で、場が少しずつなごんでいくのが感じられました。

私のグループになってくれた10名のみなさん。立場は大学生、公務員、会社員……、世代もさまざまです。自己紹介をしながらも、明日のフィールドワークで何をするのか、何を成果として求められているのか把握できず、不安な様子が手にとるように伝わってきます。予想外に、空堀を訪れたことのない方が多かったため、当日はゆるやかなつながりで、まち全体の見どころをはしごすることにしました。「まちで暮らしている人の話が聞きたい」、「触れ合いたい」という希望が多い中で、ポイントを絞り込まないこのやり方が吉と出るか凶と出るか。また、こだわりをもつ参加者がついてきてくれるのか、個々が自由に歩き回ることになったらグループの意見をひとつにまとめることができ

るのか、不安のつきない作戦会議となりました。

24日夜のリーダー・ミーティングでは、参加者の多様なニーズをいかにフィールドワークに活かすか、悩むリーダーも出てきて、その夜も白熱した議論が交わされました。

フィールドワーク当日の25日は小雪舞い散るあいにくの天気と思いきや、会場となったお屋敷再生複合ショップ「練」の2階「エクチュア」の窓から見る雪の様子は、映画の1シーンのように美しく、ゲストの六波羅さんたちのお話を聞きながら、歴史を刻んだ建物に縁あって集った仲間たちをすごく近いものに感じた時間でした。まち歩きを開始している情報交換するうちに、個々の歩くスピードはばらばらに。空堀をはじめ訪れた、デザインを勉強している学生さんは「このまちは体が坂道を感じる、不思議な感覚ですね」とのこと。同じ場所を歩いても個々の感じ方は違う、ということに気づいた一言でした。少し離れた長屋再生複合ショップ「惣」では、自然のなりゆきで店の人と参加者との質疑応答がはじまり、地域とお店の関係に関心は集中し、店の人も本音をちらほら。参加者の積極的な姿勢と上手な気づけに感心しました。屋食時はすっかり打ち解け、名刺交換や情報交換も自然と進み、集めてきた情報を確認したり共有したりと、活発なランチ・ミーティングとなりました。空堀地区にとって、来客を増やすことが住民にとっていいことなのか、このまちが10年、20年と注目され続けるにはどうしたらいいのかなど、関心はいくつかに分かれ、最終的に「このまちをもっと効果的にPRするための方法」と「もっと

1月24日(土)~25日(日)、應典院で「トヨタ・アートマネジメント講座(以下、TAMと略)大阪セッション」を開催しました。今回の最大のポイントは、フィールドワークを行ったことです。アートのもつ創造的パワーを活かし、地域を創造性豊かな場に再編している現場を訪ね、情報を収集したり意見交換をしながら、参加者自身のマネジメント力を発揮する機会をつくりました。全国から集まった80名は、アートマネジメントや文化政策、まちづくりに関心のある人々。熱気あふれる議論が展開された2日間を振り返ってみましょう。

TAMはトヨタ自動車のメセナ(芸術文化活動)の一環として、1996年から全国30地域で50回開催(今回は51回目)。地域社会と芸術文化を結ぶ人材(アートマネージャー)の育成と、アートを通じた地域社会の活性化を目的としている。

お店と地域とアートの関係を考えてはどうか」という意見に分かれました。昼食後、気になっていた雑貨屋に引き返し、改めてヒアリングをしに行った人がいたり、参加者の取り組みは想像をはるかに超えて積極的で、時間を気にしている自分をつまらなく感じたほです。

たしかに最後の発表は、時間の短さゆえにまとめきれなかった心残りもあったようです。しかし、限られた時間で形にし、ほとんどのメンバーがなんらかの形で発表するという役割分担はすばらしい連携だったと思います。そして、終了後もこの出合いを大切に思い、創造的な関係を築いていこうという動きにも発展しています。今後、まとめきれなかった心残りは、それぞれの場に持ち帰ってきつと実践していけるだろうという手ごたえを感じました。

振り返ってみて、最初のミーティングから1カ月半、長いようであつという間でした。今回の体験が私にとって、血になり肉になった実感があるのは、たいへんうれしいことです。つねに前向きに考えるリーダーたちからは、どんなに行き詰まっても妥協や後ろ向き発言はついぞ聞かれませんでした。関わるほどに思い入れが強くなるTAMを、できるだけ多くの人に知ってもらいたくて話をし、チラシを手渡していった自分がいます。ファシリテーターとして参加者の活動を見守り、新しく生まれるものを辛抱強く待つ黒子に徹することは想像以上にむずかしかったです。

今回のグループ・リーダー体験は、さまざまな人や場との出合いを通して、「アートの力を活かした暮らし」というものを考えていく本格的な第一歩になりました。

トヨタ・アートマネジメント講座 Vol. 51 大阪セッション

まちとアートの練習問題 ~芸術化する現場のフィールドワーク~

日時●2004年1月24日(土)~25日(日)
メイン会場●應典院

【主催】
トヨタ自動車株式会社、應典院寺町倶楽部

【協力】
大阪府トヨタ販売会社グループ
社団法人 企業メセナ協議会

【監修】
市村作知雄(TAM運営委員/舞台芸術ディレクター)



「アート」と出会い直したTAM」

立命館大学政策科学部3年生 石田圭佑

私の人生を振り返ってみると、アートに接する機会には比較的恵まれていました。しかし、それでもアートと言えば、私にとってはまるで違う世界のここのように感じていたのです。私は幼い頃、父親の仕事の都合でヨーロッパに滞在していたこともあり、多くの美術館に足を運ぶ機会を得ました。そこは、それこそ美術の教科書に出てくるような、そして日本人だったら誰でも知っているような名画ばかりが展示されていたのです。しかし、当時の私は絵画の価値も、よさもまったくわかりませんでした。数多く触れていたとはいえ、アートは私にとって高尚な趣味のように見え、距離を感じざるを得ませんでした。

もちろん、いまでも現代アートなど、はっきり言ってまだよさがわからないというのが本音ではあります。時が経ち、自分自身が成長しても、アートとの距離はあまり埋まらなかったのかも知れません。しかし、今回TAMの運営に関わり、考え方が少し変わりました。

アートは理解するものではないのかも知れません。心で感じるもの、それがアートである気がします。私はいままでもアートを理解しようとしてきましたが、しようとするほどわからなくなってくるのです。見方を変えたら肩肘を張らなくなり、アートはけっこう遠い世界のものではなく、自らで作り

上げ、その中で自己実現していく手段ではないかと思うようになりました。そして「その力を持続的に発揮していくことで、最終的には地域やまちが元気になるものなのだ」と今回感じたのです。

私にとって、TAMは2日間だけのものではありません。1か月以上前からの準備で、應典院や大阪市立大学大学院、地域計画建築研究所の方々と打ち合わせを重ねな

「アートに生きるための戦い」への畏れ

(株)地域計画建築研究所 大阪事務所 第2計画部 森岡 武

建築デザインを志した高校時代からは続くているジーンズに、破れたデニムシャツ。いつ息絶えてもいいように真新しい下着。とどめに頭は黒のハンチング。スタイルはすでに戦闘モードです。いざ戦場へ。

トヨタ・アートマネジメント講座大阪セッション、まったくすごいトラップ(罠)を仕掛けたものです。短い時間に欲張り過ぎのプログラム。時間不足の感がぬぐえない進行の中に、現代社会のカオスが垣間見えます。すごいスピードで飛び交う情報をセーブするメディアは、自分自身と用意された仲間のみ。限られた時間の中で生きた情報を手にする唯一の方法、それは一歩一歩ていねいに、仲間と関係づくりの葡萄前進をすることでした。簡単そうに見えてなかなかできない、けっこう辛い姿勢でした。

陸かと思うと海。フィールドワークという海原に放り出された参加者は水面のざわめきに身をゆだね茶婦茶婦。いったい、何人おぼれるのだろう? ライフ・セイバー(救助者)として身構えていた私は、浜辺で一人バタフライの練習でした。

がら、第一線で活躍されている方々の話が聞けただけでなく、ともにひとつのイベントを作り上げたことは私にとって、たいへん貴重な経験でした。アートへの距離を縮めることができたのはもちろん、自分自身の生き方を考える上で参考となる数多くの方と巡り会えたからです。それだけで私はとても楽しく過ごさせていただきましたし、スタッフの機会を与えてくださったすべての方々にこの場を借りてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

なんでバタフライかって? バタフライで救助されたら笑えるでしょ?

無事泳ぎ帰ったことを祝う祭場では、泳ぎきったスピードや追求されたフォームには目もくれず、代表選手の元気さとオーラの中に目を惹かれます。「なんや、最後はやっぱ人かいな」と手を合わせた瞬間です(感謝)。充実感と喪失感がパラレルにやってくる違和感は、最近では味わえない貴重な体験でした。

最後は空中戦。浮遊感とともに心地よい疲労感との戦いです。意識はしばらく宙にさまよったまま、なかなか戻ってこようとはしませんでした。しかし、芸術化する現場の熱いライブ感を、レンジでチンすることのむなしさに気づかされたとき、思考は再び「アートマネジメントとは?」という根本的な問いに対し、戦いを挑みはじめました。

自分自身と、家族と、仲間と、社会と、まちと……ていねいに、ゆっくりと、深く会話していますか? 戦うことを忘れていませんか? 今回巧みに仕掛けられたトラップには、楽しく会話しオシャレに戦うヒントが隠されていました。それがアートです。一見、複雑・多様にみえる諸現象から無駄な情報をそぎ落とす力。単純・明快な実体験として直接脳みそをゆらす波動。そこには言葉を越えた感動と共振が待っていました。これらを巧みにあやつる「アートマネージャー」。やめられませんな。アートに生きるための戦いがここ大阪からはじまったのです。

Interview

■大阪セッションを振り返って

1996年からTAMを、全国各地の地域コーディネーターと協同を重ねてきて、今回の應典院のセッションで51回目となります。当初、企画段階では、かなり欲張りな内容で、消化不良になるのではと心配しましたが、実際は杞憂に終わりました。与えられた条件を十分に活かそうと、参加者自身がとても前向きに取り組んでくれたのがうれしかったです。アートをまちの中で捉えていこうとする試みも、新しい方法論として新鮮だったのではないのでしょうか。

また、事前に時間をかけて準備されてきたのがよくわかりました。TAMでは、参加者がその場に飛び込んだとき、それを吸収するクッション役がとても大切になるのですが、今回は應典院サイドのスタッフやリーダーの果たした役割が大きかったと思います。私たちの目に見えるのはわずか2日間でしたが、事前事後の時間の中で積み上げられてきた場の堆肥は確実に育ってきていると思いました。ここから地域の人材の厚い層ができていく予感がしました。

■市民社会にとって芸術とは

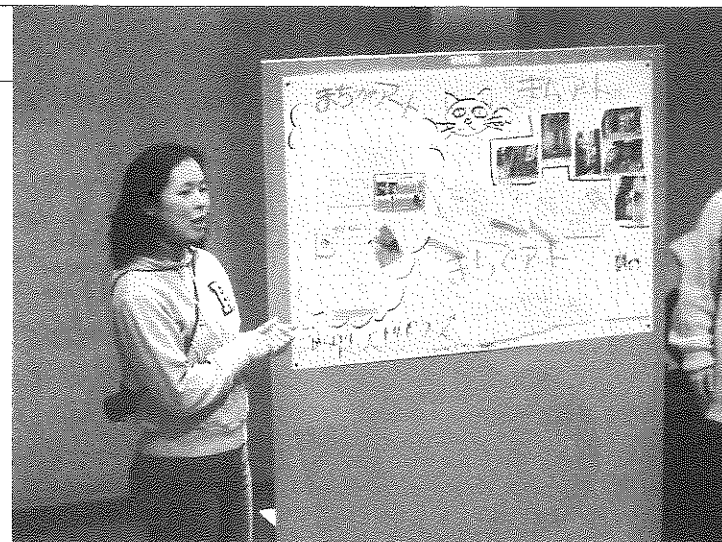
現代のアートの拠点は、大小の二極化が進んでいます。高い芸術性をまとめた成果で見せていく大きな拠点と、さまざまな社会とのつながりの中で見せていく小さな拠点です。とくに後者は芸術だけに特化したものではなく、いろんな多様性を受け入れ、また生み出す場所であってほしい、と思います。いまは自分の感受性さえ画一的なものにしないで生きていく時代ですが、アートにはもう一度自分の固有に立ち返って、原初的なものを磨き直す役割があると思

います。いわば小さな拠点は、芸術の根本的な意味を洗い直そうとしている、とも言えます。

企業メセナも最初、芸術にはまったく縁のないサラリーマンがはじめました。やがて彼ら彼女らが芸術にとりつかれると、これまでに

なかった新しい独自の視点が入ることになる。企業が持ち込んだものは、明らかにいままでとは違う芸術観だったんですね。

この不景気なご時世に、企業や社会がなぜ芸術を支援するのか、という問いは、言



てきました。大学の専門学科やアートマネージャーをめざす若者も増えました。しかし、AMが市民社会において果たすべき役割は何なのか、まだその主題は吟味され尽くしてはいません。AMは、行政や企業から上

市民社会における芸術の使命を再定義する試みを ～熊倉純子さん(TAM運営委員)インタビュー～

い換えれば市民の暮らしや生活に、本当に芸術は必要なのかという問いに通じるものでしょう。それに対し、根本的な洗い出しを試みたのがTAMの7年間でした。地域には、民間の発意や個人の創意工夫とか、潜在的な資源がたくさん眠っていて、それをどう掘り起こし、新たなネットワークや多様な人材の層を作るのか、それがTAMが地域レベルのアートマネジメント(以下、AMと略)を推進した目的でもあったのです。

■アートマネジメントのこれから

AMという言葉は、ここ10年でかなり定着し

手に助成金をもらうことでもなければ、昔ながらの動員や宣伝戦略を言うものではありません。

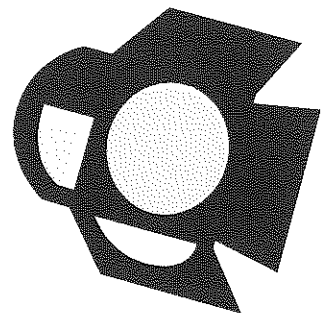
たとえば何事も効率第一主義の現代社会において、きわめて効率が悪く、目的のあいまいなアートを扱うことにどういう意味があるのか、芸術のはみ出していく力、問題を引き起こし、ときには破壊するような力から、私たちは何を獲得することができるのか、AMは市民社会における芸術の使命を再定義しようとする試みの一つです。

その意味で、應典院の活動には期待しています。お寺は昔からコミュニティの拠点でしたが、アートと寺子屋がうまく融合している。住職の秋田さんが、宗教的なミッションとして正面から向き合っている姿にも説得力を感じます。これからは、カリスマではない、ごく普通の人たちが、應典院の次の担い手となって、この場を作り上げていく主人公になってほしいと思います。

(文責＝編集部)



SPACE×DRAMA2004 参加劇団紹介



満月動物園 (7/12~14公演予定)

代表・演出・脚本: 戒田竜治

1999年、大阪市立大学出身の戒田竜治を中心として結成。「救いよりも希望、墮落よりも絶望」という独特の世界観を追求し続け、観る者それぞれにパーソナルな訴求力を持った作品づくりをめざす。

月曜劇団 (7/26~28公演予定)

代表・作: 竹中諒、演出: 上原日呂

2001年1月旗揚げ。一人ひとりが密接に関わって関係性を築いていく過程を、作品全体で表現する。最後に観客が加わってはいじめて作品は完成するという発想のもと、「生(ライブ)の空間をお客様に楽しんでいただくこと」をめざす。

ネコノハナ劇場 (8/2~4公演予定)

代表・作・演出: 殿井めぐみ

2003年3月旗揚げ。日常の生活の一コマ一コマの中に潜む「やるせなさ」や「ため息」を、ときには切なく、ときには楽しく舞台上に表す。人と人とのつながりの中、交わされるドラマ、そこに生まれる痛みを表現する中で、自分自身だけでなく観客とともに成長できる芝居をめざす。

夏に開催する舞台芸術祭の参加劇団をご紹介します。公演日程も決まり、ただいま準備の真っ最中。今年もどうぞご期待下さい!

劇団レトルト内閣 (8/9~11公演予定)

代表: 川内信弥、作・演出: ことぶき

2001年3月旗揚げ。「メランコリック・エンターテインメント」と銘打つ作品を上演している。耽美・アンニュイ・デカダンを彷彿させる作品は、エンターテインメントを機軸としながらも、他のエンターテインメント劇団とは一線を画すものをめざしている。言葉のみでは表現しきれない感覚を補うために、コンテンポラリーダンス界から客演を招くなど、身体表現による作品づくりも特徴である。

劇団ショウダウン (8/16~18公演予定)

主宰・作・演出: ナツメクニオ

2001年1月旗揚げ。「頭のいらないエンターテインメント」を合い言葉に、映像・ロック音楽・特殊メイク・殺陣など、おもしろいものは貪欲に取り込む。固定観念や既存の演劇の壁を取り払い、新しいエンターテインメントの風を「京都最速」の名のもとに巻き起こしている。

劇団鹿殺し (7/30~8/1公演予定)

※三者協働プロデュース公演

代表・作家: 丸尾丸一郎、演出: 髭の子チョピン

2000年、髭の子チョピンと丸尾丸一郎の呼びかけにより旗揚げ。初期はつかこうへい氏の作品を上演。半年の活動休止後、オリジナル作品で活動再開。戦争、革命、殺人等を題材に、人間のネガティブな感情の爆発を表現。ロックバンドによる生演奏など、土臭さ、熱さ、男気が「ガツンと殴ってギュッと抱きしめる」独特の世界を展開する。また、半裸の男たちによるセルフアンコール等、旺盛なサービス精神で「劇場に入ったときから帰るまで」のお楽しみがもりたくさん。

秋田住職発

應典院 掲示板

去年の12月、直腸の切除のため、思いがけず17日間の入院生活を経験することになりました。まさか自分が介護の対象になるとは思っていませんでしたが、期間中、看護士さんをはじめ多くの方の励ましと支えをいただきました。

人が人を支える、というもっとも原則的な営みの中で私がいちばん感じたことは、「手わざ」と「言葉がけ」のサポートでした。ここで具体的に書く紙幅はありませんが、身体の介護だけでなく、気遣いと心配りといった、相互に交わされる精神的なコミュニケーションによって、ずいぶん癒されました。

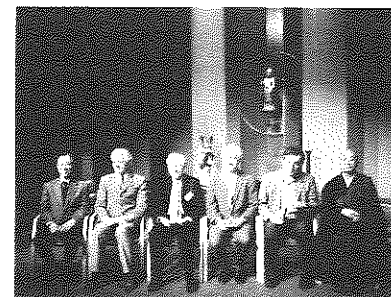
人間はひとりでは生きていけません。で、その「弱さ」をみんなでどう支え、社会全体の力としていけるのか、ケアの時代に問われているものは大きいと思います。ともかくもこの貴重な経験を、私のこれからの人生の転機としたい、と念じています。

■大蓮寺で10年ぶりの五重相伝

浄土宗のお寺にとって最重要な修行道場である五重相伝が、昨年11月20日から24日まで5日間にわたって開演されました。ありがたくも57名の善男善女が、礼拝と聞法に励む修行を無事勤め上げていただきました。尊敬する清雲寺・中原実道上人には、正しい念仏信仰の道をご勧誡いただきました。私も皆様のお支えによって、なんとかお釈迦様の名代である伝灯仏子の大役を務めさせていただきました。ありがとうございました。

■海外研究者の一行、應典院を見学

去る2月9日、世界の都市研究の一線の



研究者のみなさんが應典院を見学、その理念や活動について1時間の講演をさせていただきました。この訪問は、国際シンポジウム「新・都市の時代～創造都市への挑戦」(主催:大阪市、(財)大阪21世紀協会、大阪商工会議所、(財)大阪国際交流センター)の一環で、エクスカッションとして

企画されたもの。一行はロンドン大学のピーター・ホール教授、カリフォルニア大学のアラン・スコット教授、シンクタンク「コメディア」代表のチャールズ・ランドリー氏ら錚々たる顔ぶれで、いささか緊張してしまいました。

せっかくのお寺参りでもありましたので、講演の前には歓迎の法要とみなさんにお焼香の体験をしていただきました。

■コミュニティ・ビジネスの可能性

新しい地域貢献型のビジネスとして注目されるコミュニティ・ビジネス(CB)ですが、去る2月13日、大阪商工会議所主催の「まちづくりCB 交流ネットワーク会議」で、市民バンク代表・片岡勝さんらとシンポジウムに参加しました。これは昨年来、大阪府と大商の「大阪・まちの賑わいづくり事業」の一環として開催されたもので、應典院寺町倶楽部のアーツプロジェクトを通して、若年の雇用対策としての新しいビジネスの可能性についてお話ししました。

■春の寺町、人形フェスでにぎわう

毎年、春の寺町の恒例のイベントとなった「なにわ人形芝居フェスティバル」、今年は来る4月4日、下寺町全域で盛大に開催されます。おなじみのお寺劇場での人形劇上演の他、ご詠歌の会、俳句の会、歴史漫遊の会などさまざまな企画が盛りだくさんです。また正午からは、寺町の若手僧侶が主催して「花まつりお練り行列」を実施、子どもたちが白い象を曳きながら、誕生仏とともに寺町を練る行列もあります。

この頃は寺町の桜も見頃。ぜひご家族連れでご参加ください。

エンディング見本市4月に開催!

應典院の本寺・大蓮寺では、NPOと協働して「大蓮寺・エンディングを考える市民の会」を主宰していますが、来る4月17・18日の両日、「エンディング見本市」を開催することとなりました。エンディングとはよりよき人生の完成期の意、医療、介護、葬送、仏事など多様なテーマに関する情報を一堂に集め紹介します。

主要プログラムとしては、17日の模擬葬儀「お葬式のすべて」、お墓ツアー「現代お墓事情」の開催、18日にはシンポジウム「個を支えあう地域社会のあり方」について、NPOの代表が語り合います。その他にも、ネットワークNPOの活動紹介コーナー、自分らしい葬送提案コーナーなど盛りだくさんな内容となっています(一部有料)。「見る・聞く」だけでなく、「参加」型の講座を多く用意しました。

お寺を核とした、地域のサポートネットワークづくりにご期待ください。

※詳細は同会まで 06-6774-0113

